

溪 流

昭和九年六月一日 納本
昭和九年六月五日 發行

創 刊 號



溪 流 會



言 頭 卷

溪流、夏井川の溪流……
 龍場の瀧を中心に上流下流十數哩の間、碧水、奇
 岩を嚙んで、幾條となく乱して懸けた溪流、急湍
 となり、深潭となり、飛瀑を連ねて、蛇蜿蜒の如
 く流るゝ溪流。一味秀麗の氣を催する元始郷。兩
 岸は翠巒が高く聳え、春は満山に咲き亂るゝ岩
 つつじの色彩、秋は全山に燃ゆる紅葉の美觀。正
 に是れ山紫水明の神秘郷……
 本誌「溪流」——この元始郷——この神秘郷から
 生れたのである

● 目 次 ●

卷頭言	一	深山の花	二
創刊の辭	二	磐城川前小唄	二
會員諸兄と契ふ	三	ルンペンの唄	二
成功の秘訣	四	戀知る頃	三
我が郷土の諸氏へ	五	じやんけんはい	三
無花果	六	愛すればこそ	三
苗代	六	永山華秋選	四
春の夜	六	僕	五
春の夜	六	炭ガマ	五
ヒヤシンス	六	さみしらに	六
落花	七	編輯後記	六
青月	七	運命の相互	七
芋蒔	七		
追憶	二		
若き日の	二		
十六の	九		
春の	九		
星	九		
ば	八		
め	八		
花	八		
母	八		
出	七		
れ	七		

創刊の辭

會長 西山 朗 月

今回多年宿願たりし文藝誌『溪流』を發刊し得たるは、不肖真に欣喜に堪えない。

これ偏ひに各位の御熱誠なる御後援と御好意の賜なりと信じ寧心より深く感謝する次第である。

懷古するに、我が郷土に於ける文藝誌は、夙に二、三の發刊を見たるも、永續性を欠き現在繼續せるもの無きを遺憾とす。

今や非常時に際會し、若人の心躍るまゝに貴重なる修養期を無意義に過すべきではない。

故に此處に於て、適切なる文藝誌の發刊は切に其の必要を痛感し、過般來種々考慮を重ねる處なるも、會員不足其の他未完の點多き爲前後相償はず、遺憾乍ら實現の運びに至らなかつたのである。

今後は自力更生をモットーとし努めて實情に即した計劃を樹て、極力經常支出の合理化を圖り、萬難を排し會員諸氏の要望御期待に背かざる様之が改善並に内容の充實に主力を注ぎ邁進致したい。

然し如何に會の組織、内容共に宗壁を期すと雖も、會員相互の扶助觀念が稀薄にては到底初期の目的を遂行し得ざるは、賢明なる諸氏の良く察知する處と思料するも斯様な點に留意し、本誌上に各自の蘊蓄體驗を披瀝し精神の涵養並に研鑽に務め、猶一益の御鞭撻激勵の程御願ひ致す次第である。

庶幾くば本誌をして健かに成育せしめ理想的文藝誌たらん事を……。

終りのぞみ會員諸氏の御健康と御發展を祈り擱筆す。

會員諸兄と契ふ

伊 藤 幸 風

社會が複雑になるに従つて民衆の力次第に大きくなり他人の論理を研究するのみでは物足らなくなり己が意志を言葉なり或は文字なりにて直接民衆の多くに知らし己が意見の善否を評され良きを探り惡しきを矯し思想堅實味を得る事の必要が日と共に痛切になつて來ました。

「熱誠なる一言は能く萬人を立たしむ」と云ふ言は良く此の間の意味を表明して居ると思ひます。

故に我々青年が文字に依つて知徳を研磨致さなかつたならば五尺の男子も獨活の太木と何等異なる處が無いと思ひます。

往昔支那に於て東胤と云ふ人は螢を集めて其の光で勉強し孫康と云ふ人は雪を積んで其の明るみで讀書したとの事がありますが之等は賢明なる會員諸兄の熟知せらるゝ事と存じます。されば吾々も古人の苦學の跡を顧みて寸陰を惜しみて仕事の寸暇にでも文學を研究致そうではありませんか。

今假りに此の地を繙き見るに川前村にも今迄随分多くの文藝雜誌の發刊を見た様ですが現姿の見れぬ事を非常に残念に存じ此處に先輩諸氏の意を繼ぎ溪流なる文藝誌を發刊致しましたる處各位意を同じう致されまして此の贊助を見る事の出來ました事は賢明なる會員諸兄の賜に外ならず真に欣喜に堪えぬ次第で御座います。

此の期に當りまして永久に之の溪流なる雜誌を利用致され大いに文學研究の舞臺と爲してそこに何等かの收穫あらん事を待望致し地球壊滅期迄此の川前の溪流誌を特續せん事を會員の皆様と契ひ擱筆致す次第であります。

無花果

無花果の木の芽はやゝふくらみて今日此の頃春はあたたか
この頃の家のまつしき知る祖父が薬止めんと云ふに泣かざる
告げがたき心たもちつしみと降る春雨に見入りたるかも

苗代

山峡の櫻咲きそめし峽村は苗代しめて種蒔き急ぐ
ちよろちよると流るゝ川のいつもより水量増して春めきにけり
赤々と夕映えにける裏山に淋しくきぬ雉子啼く聲

春の夜

友だちと話はつみて春の夜を更かせば風はやゝ冷えて來つ
さかり住む君思ひおれば庭先の櫻こたく花を散らせる
友だちとあそびほけ來し夕暮の梅咲く徑に先生とあふ

春

清瀧の流れすがしき岩陰にぬれて咲きたる水草の花
すみれ摘む愛し乙女のおくれ毛にそよそよと吹く春の風かな
春の日ののどけき野邊の若草にいねつつ物を思ひけるかな

ヒヤシンス

休日のやすさに起きてふと見たる庭に芽ぶけるヒヤシンスの青
今朝ばかり務めは吾れにかかはりなし庭に芽ふきしヒヤシンスを愛づ
休日のやすさにおれは庭つづきの山の林に鶯來啼く

棚 真 涼 月

木 村 文 郎

(矢大臣山麓にて)

長 瀬 川 畔

西 山 朗 月

戸 部 曙 歌

落 花

松 本 富 清

思ひ出

M S 生

街ぬけて山里ふかく一人來て聞くはなつかしうぐひすの聲
暮れなつむ櫻下道吾が來れば散りしく花に道の明るき
縁側に音もなく散る花びらを眺めついこふ晝の静けさ

宵 月

宇 佐 見 輝 月

宵月の淡く光れる墓原を通ればさみし亡母の浮び來
あかあかとをぶすなの山に日は入りて淋しく啼ける山鳩の聲
鶯の啼くこえきつ山畑に芽ふきしるけき麥ふみており

芋 蒔 き

根 本 久 雄

暮れなつむ山ふところに鼻の啼く音ききつゝ芋蒔きいそぐ
若草の芽ふきすかしき川べりに魚すくひする子供等のむれ

別 れ

常 恒 秋 月

ふたとせを務めなれにし業を辭職ねばならぬ己ならむか
すべなくて今日別れゆく己なるふたとせ住みし川前の里

麥

北 野 香 月

T子は福島市の或る病院の看護婦
に採用せられて行つた。其の中に
僕も或る會社に職を得てより互に
清く愛し合つて居た中也割れ各々
異つた營利會社の元に支配せられ
共に吾身の自由を束縛せられ悶々
の日を送らねばならぬ悲しい身と
成つてしまつた。
T子は翌年の正月不意に母に逝去
せられた其年の舊盆には互に歸郷
する事が出來たので兩人で亡き母
の墓前に頼いた時T子の白い顔の
澄んだ瞳には何やら光るものが見
受けられた僕の兩眼にも熱い何も
のかが感受されて居た何時しか二
人は固く手結び暫し無言の時を
過したT子の微なる悲しみの泣聲
しかと結ばれし白蠟の如き手

うらうらと陽のふりそそぐ山畑に嫩きはたちて麥萌えにけり
庭先に忘れ寝ねける幼子の赤ゴム靴は愛しかりけり

亡 母

秋 元 キ ミ

おさなくて母を亡せる己なる暮れそむ部屋に亡母戀ひてゐつ
父親の寝しつまりたる次の間に灯かくして手紙書く吾は

梨の花

新 妻 國 夫

梨の花はのかに匂ふ曇り日の馬屋裏にひとりもの思ひおり
すべなくて職工となりしうつそみの已さみしくパン食みており
食いあまりの半分のパンもポケットにかくして歸る已となりしか

務 め

高 田 ク ラ

薬品にあれし手肌の疼きつゝ物洗ひ居れば血の惨みでる
つとめする身のさみしさを思居れば朝時雨來て氣寒さおぼゆ
病人の看護の暇にふと思ふ古郷の父母の如何におはすや
戀するにあらねどなせか慕しくて君が名のみを書きつらねけり

はワナノゝと震えてた。永遠に地
下に眠れる亡母も涙なしには居ら
れなかつた事でせう。

櫻

猪 狩 螢 燭

花はまだ五六輪半分咲きに成らぬ
が潔よい櫻花、染めた様な緑の夢
から赤白く膨らみ出た蕾の幾個か
を添へて、春も半ばうら／＼この
どけき春の日に勇ましく、ぼつち
りと咲いて居る芳烈なその香り、
亦花は櫻本人は武士。とも言ふが
如くに櫻は潔白な、そして雄々し
い花だ。



原 つ ば

隆 吉

十六の春

長 瀬 川 畔

緑りの原つばにいこへば
春の香りの濃密さ
若草はそよ風に揺れてゐる
霞む山々は夢のやうに
のんびりした春景色
春の陽は天地の生物をことほぐやうに
あらゆるもの脊を撫でてゐる
俺達の心ものびるやうだ
ぐんぐん伸びてゐる
若草のやうに

流れ星

西 山 朗 月

今宵も一つ流れ星
晴れ渡つた春の空に
稲妻の如き一線をなげて
空洞な暗の下界へ
消へてゆく
宿命的な強い強い
暗示を我に與えて

春の五月の青空に
はなやかなりし
我が十六の春は
萬花の花ビラにのりて
てふてふの跡を見ながら
無ごんのままに
ひそかにいづこいかへ去つ行く
秋は淋しく云ふけれども
吾を去り行く
十六の春も又淋し
あゝいづこでなくか
駒のいなゝき

× × ×

春の使命

矢内トシノ

春よ春よ新春よ
 お前は尊い使命を持つて
 お訪れて来てくれたのか
 何んと慕しい懐しい春だらう
 私は春と言ふ名を聞えて
 胸の高なるをやまぬのに
 本當に尊い使命を持つて
 桶賣の地に來てくれた
 私等乙女のみづ／＼しい
 未來に生きる喜びを
 與へてくれる尊い使命の持主
 春よお前の落す一滴の涙が
 地を濡はして芽生いさせ
 花を咲かせて實を結ぶなら
 おしむ所なく涙を流せ
 春雨の度降る毎に
 野も山も甦り
 朝の光の射すことに

木の芽、草の芽は
 勢いよく伸びて行く
 まして若き乙女の私等は
 どんなに大きな望を持つて
 未來に向つて進み行くのだらう
 尊い使命の春よ
 新人たる我々の胸に
 新しき光と熱と與へて
 充分の使命を果してくれる
 尊い使命の持主よ
 それは春と呼ぶるゝ
 女神なのかも知れぬ



若き日の惱

佐藤黎明

心に泣きて鎌をとる
 彼女の吾れを頼りて心を強く
 生きてゆく父母をおもへば
 涙ぐまじや
 若き日の希望は空し
 あかあかと
 今日明日は暮るゝ
 おゝふるさとにわび住みて
 時の流れをきゝながら
 せつなく胸はもゆるとも
 このさだめをば如何にせむ

追憶

花霞

お玉が最後の息を引取る時
 「ね貴方御幸福にぞ」
 一言残して逝つた
 お前のことを思ふ時
 この胸が一ぱいになる

お前は希望に輝いてゐた
 びち／＼してゐる魚のやうに
 私は力にみち／＼ていた
 お前の姿を見る度に
 歡びにあふれて居つた
 あゝ楽しい夢を見て居たのも
 みんな過去になつてしまつた
 心よ絶えず寂しくないか
 孤獨を悲しくないか
 遠い一つの離れ星のやうに
 遠い夜空の星を見る毎に

深山の花

北野香月

人にかくれて咲く花を
 黙つてみつめて居りました
 赤い小さいこの花は
 なせに黙々居るでせう
 昨日の雨にうたれても
 今日風の吹かてれも
 ひら／＼舞ふ蝶にさい
 やつぱり黙々咲いてます
 どんな心で咲いたのか
 小さく赤く咲く花よ
 何かをかくして居るやうな
 あなたのハートを思ひます

磐城川前小唄

戸 曙 部 歌

春はうれしい花見と洒落て
戀の川前二人づれ

思ひ咲かせて相寄りそつて
ながめゆく身は夢うつつ

ハ―寄つてゆかんせ川前に

つつち桃色花の里

紅葉くれない戀の里（囃子繰返し）

夏はうれしい川前橋に

誰をまつやらやさすがた

あの娘呼ぶのか河鹿の聲に

胸をおこらす夕涼み

秋はうれしい思ひでそめる

そめた紅葉のいとほしさ

紅葉狩すりや心ももえて

忘れられない人を知る

冬はうれしい主さんの胸に
思ひ降らした峰の雪

雪見六ツ花炬燵の暮し

思ひ縫ひ込む針仕事

ルンペンの唄

青 柳 子

俺らルンペン

浮世の小舟

どこの港に着くのやら

まゝよほまかせ風まかせ

俺はルンペン

明日の身知らぬ

どうせ行果は雲と風

暗いお空に星がとぶ

俺はルンペン

宿なし者よ

暗にホロロと山鳥啼けば

捨てた故郷が忘れぬ

小唄 戀知る頃

青 柳 子

逢つた日でさい淋しいの

何だかものが云ないの

クローバ摘んだり干切たり

胸から出せぬ此のほのほ

便り来ないと淋しいの

遠いお山をながめては

貴男のことを思ふのよ

とどいたらうか此の想

別れる時は淋しいの

逢は別れの始めとか

知て居乍ら此の心

泪のせきが切れちやうの

じやんけんぽい

佐 藤 飯

春が来たぞえじやんけんぽい
石はあなたのお堅い心

冷めたい冷めたい淋しい心
たまにやバアと出て開こぢやないか
春が来たぞいじやんけんぽい

愛すればこそ

佐 藤 黎 明

愛なればこそ悩む

愛は強し

愛は樂し

愛？愛なるがゆいに生きん

愛は總べて人生を軟ぐ

これ愛の強い所以か



永山華秋選

青柳子

又同じ人に逢へけり蔵狩り

ほてりたる土間に蔵の匂かな

佐藤敏

陽炎や日に酔ふて居る茶屋女

朗月

道ばたの草にも春の恵みかな

水草の影うるはしき金魚かな

山焼の匂ひたゞよう野の小家

中村工業

溪流に顔を洗ふて登山かな

初馬耕あちこちのこし耕へけり

肥料つけて馬なきゆくや春日和

川端の櫻散りつゝ日暮れけり

螢燭

春風を帆に孕ませし漁り舟
梅雨晴きを待ち詫ひにけり青訓日

隆吉

春風やスカートの裾軽々と

青草の中に董のつゝましき

長瀬川畔

野仕事や蟻の飯引く山櫻

道ばたに札さげてある櫻かな

久雄

葉櫻やバラソルの行く野中道

うすもれる農家や桃の花盛り

苗代の案山子に鳥糞をおく

佐藤武一

大蜂のもつれて藤も散らしけり

瀬に瀧にゆらぐ日影や若楓

炭ガマ

根本久雄



僕

田伍作生

此頃の自分は眞面目な自分でない。

恰度今日の如き菜の花や櫻に浮かれる蝶の様に或る

何者かに心を奪はれてゐる、何の目的とても無いの

に徒らに心がいらだつ、そしてなんでもよろしいか

ら早くしてみたい様な感じがする、机に向つても頭

は零である。じつとしてゐると大聲で叫びたくなる

色々な物が投げたくなる。

要するに此の頃の自分は欺かざる自分でない眠つて

ゐるのか醒めてゐるのか更に不得要領である。

噫！ こうして青春もむなく過すのではあるまへ

か。



生育旺盛な柵林の山麓に（貧弱な炭焼き小屋）これ余

の天與の榮職たる製炭所なり、水煙、白煙、黄煙、黄

白煙、紺煙と煙が變化して室内は自然と明るくなり

来るばあん／＼斧は風をきつて炭材に喰へ入り二ツ

創四ツ割等均等に割らんとする一念のみ、技神に入

り斧觸れすして直つ二ツとなる、無心のうちに炭材

の山を築く、漸くにして室内を覗けば精練既によし

丈餘の鐵棒を振へば熱火我にせまり、日は高くして

風も無く、玉なす汗が地を濕らし、熱火を消す。灼

熱の室内に炭材充滿すれば、已ずと水煙空中に舞へ

點火口の焚火はかがり火の如し。金銀の音響を發

せる木炭を俵裝なし、特等の検査札を椿の花の如く

優美にして積み重ねたる俵の山、かくて（トラツク）

平方面に賣出すのである



さみしらに

戸部曙歌

さみしらに
さみしらに
さみしらに
まともたれて
わがなげば
さきたるはなの
ほろほろと
ふるはるさめに
ちるさくら
あゝ十七のはるはゆく
あゝ十七のはるはゆく

さみしらに
さみしらに
さみしらに
まともたれて
かのきみに
おもひよせつつ
なきぬれて
なみだにちらす
こひごころ
あゝ十七のはるはゆく

編輯後記

△花見、花見と人心を浮されつつあつた春もすつかり姿をかくし、初夏の新装全く成つた六月は明けた薫風洋々と吹く爽快さ！、何かしら吾等若人の心を勇躍するものが感じられる。此絶好季に。機待されつつあつた『溪流』は會員諸君の多大なる御後援を得て創刊されたことは只感泣の外ない、心

から感謝の意をあらはす
△何分編輯不馴なる爲皆様の御機待に添ふやうな編輯が出来なかつた事は、かいたすも遺憾であつた。特に詩の配置は失策だつた、上手下手にかゝらず配列してしまつたのである、責任を感じてゐる。それから作品の中に随分初心者の方が見られましたが一寸手を入れて掲載した。こうしたことも何かしら研究の使用ともなれば幸甚である次號からは特選欄をもうける考へなれば、奮つて玉稿をお寄せ下さる事を切に希望する。
△誠に申おくれまして申譯ありませんが御多忙にもかゝわらず俳句の御選をして戴きました永山華秋先生、勤務中御多忙の處玉稿を戴きました山崎天津夫先生に厚く心から御禮申上ます。
△我が郷土には永山香雪先生並に永山華秋先生等の文藝に卓越せる大家が居ると云ふ事は文藝向上に最も力強く感ずる次第であります。本誌も近き將來に前先生方の御教導御鞭撻を得て今後一段の向上を期したいと思ひます。
△尙準會員費を拾錢の處拾五錢に突然改定致したる事は別紙にて御了託に御座いますやうが終りにのぞみ此の点幾重にも御詫び致します。皆様の御健康を祈る。
(戸部生)

運命の相互

幸風

自然の生命の墓の中に秋も埋り吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へ乍ら淋しく冬の日も早や暮れんとする頃こゝは磐城郡草野村、驛より一筋路に通る村の畔道を此の村には夏の避暑客以外には一寸見れぬ程垢ぬけのした女が泣きやんでスヤ／＼と寝入る赤兒を抱き乍らものうげに足どりも重々しく歩みを續けて居た。

ボート今驛より下り終列車の汽笛の音が深い眠りにをゝのかされて行かんとする村に流れた。
音は消へた 足どりは止りハツと廻りしが彼女は窪んだ眼を遠く暗い闇に覆はれんやりと黒すみ見える彼方の森に向けた。

憂鬱な苦悶と戦ひつゝ居る己が身を考へた時蒼白いやつれた顔になせか深い嘆息を洩らすのだつた。

『坊や！御祖父ちゃん御家がもう近くに居るのよ！』

物知る子供にでも話する如く彼女が呟いた。

然しなんの返事も無く天國にねむる天使の如く赤子はスヤ／＼と寢息を立てるのみ！

只コチ／＼と腕時計のセコンドの刻む音のみが答へ居るかの如く。

ボタリと落つる一滴は赤子の額を濡した。

自然の潮のリズムがゴ／＼と彼女の身を打つ時走馬燈の如く彼女の思ひは五年の昔に走る。

二

晩秋の夕間暮無心に歌へ續ける子供等の聲に何處がセンチなメロデ——の流がある庭前にシヨンボリと嘆く姿のコスモスをじつと見つめ乍ら縁側に圭子は立つて居た。

物思いに沈む圭子の眼は涙で濡んでゐる。

『圭子や』『圭子や——』奥から母の呼ぶ聲がした

『ハイ——』

常なら一言で直ぐ返事する圭子なのに今日は三言呼ばれて初めて力無い返事をしたのみで直ぐ行くともせずまいかけで涙を拭きわざと笑顔を造らんとするのだつた。

『圭子や何をして居るの』待ち兼ねたか母の言葉は大きかつた。

『はい』と小さく獨り返事をし乍ら縁側に上り家内に姿を消した

今迄山裾にあつた日は全く沈みコスモスも黒幕に包まれ淡い電燈の光りが影を障子に映し始めた。

圭子の兩親はとろろと燃ゆる赤い焚火の周りに座つて居た。
何も知らぬ兩親の姿を見る時彼女の眼には深い悲しみが、漂ひそれが薄暗い電燈の光に輝いて見へた是迄長い沈黙の中に思わす力ないうめき聲を立てた時、老いた兩親の顔が相對した母親はこちらを向いて

『圭子や何をして居るの今夜は馬鹿に變んだねこちらにきておあたり』

やさしい母の其聲を聞いた時圭子には込上げて來る涙の爲に此上母の聲に返事すら出来なかつた。獨り苦しみ彼女はじつと兩親の姿を見まもり乍らもつと／＼母の聲をききたい様な氣がした其一言のみで亦兩親は何やら語らい續けた、彼女は心の中で兩手を合し力無い聲で

『お母さん頭がいたみますから早く床せて下さい』と思ひきつてこれだけ言つた

『おやそれは大變だそれじやお藥を呑んで早くおやすみなさい』と言つて立掛けた母を『大丈夫よ私一人でお藥いたゞくわ』

この一言で母も安堵した如く元の座にすわつた、デ—と焚く松葉の音と共に夜はふけて行く。
小窓より淡くまた／＼星にさへ別れおしみ乍ら彼女は憧れの都會へと家出を決心したのだつた×××

『お父さんお母さん御許し下さい必ず都會に出てお母さん等の幸福になる様働いて來て安心致させます』と幾度か心の中で叫び乍ら遠ざかり行く我家を後に圭子の姿は暗い闇の中に消へうすらへて行つた。

コロコロと鳴くコホロギの聲がサ—と吹く秋風の音に消されてしまつた。

(次號へ)

投稿規程

◎論 說 一篇八百字以内

◎創 作 字數適宜

◎文 苑 二十字詰三十行以内

詩……………二十字詰三十行以内

短 歌……………適 宜

俳 句……………同

小品文……………二十字詰四十行以内

童 話……………適 宜

◎締 切 毎月十五日翌月發表

◎宛 名 石城郡川前村桐立一五一

◎會 員 以外 溪 流 會 編輯 部

◎取 捨 編輯 部 一 任 ノ 事

◎投稿ハ必ズ原稿用紙ノ事

◎原稿ハ採否ニ拘ラズ返戻セズ

昭和九年六月一日創本
昭和九年六月二日發行

編輯 兼 發行人 戸 部 曙 歌

印刷 所 平 町 南 町 五 九 昭 和 活 版 所

發行 所 石 城 郡 川 前 村 桐 立 一 五 一 溪 流 會

【非 賣 品】

新緑の候毎度有難度御座います

- 雜貨部……品質ハ良ク安價ニシテ買心地満点
- 運輸部……遠近貨物輸出ノ節ハ當部へ
- 薪炭部……最低價額ニテ御取引致シマス
- 青果部……果實ト野菜ノ低廉販賣

新鮮ナサービスと親切

御用命下サイマシ

御満足ヲ頂ケルコト

ニ確心シテヤマセン

皆様の店……………新 仲 屋 商 店

磐越東線川前驛前



安 イ 店

酒
醬
石
水
罐
麵
金
雜
學
用
品

油
油
油
詰
類
物
貨
品

其他多少に拘らず御用命被下度
尙該品中特別御注文の際は特に
御相談に應じます

銘酒 會津姫販賣店

屋號 (あつまや)

會 田 商 店

川前村下桶賣矢田谷地